

グローバル化（全球化）言説をめぐって

－異文化性の側面－

丸 井 一 郎

1. 導 入

以下のような言説を目にする。掲載メディアの性質からして、経済領域に関わる実用テキストの類である。

時代のパラダイムを一言でいえば「グローバリゼーション」ということになる。グローバリゼーションとは言い換えれば、日本独特のドメスティックな仕組みの破壊を意味する。グローバリゼーションの恩恵は大きい、その過程には既存システムの破壊による痛みがともなったこともまた事実である。今後のトレンドを形成する新たな変化の芽：市場原理が隅々まで行き渡れば、グローバリゼーションは完結に向かう。そして2006年には新たな変化の芽が生じるであろう。（「歴史的転換点に立つ日本企業 －2006年のトレンド大予測（前編）－[筆者]小屋知幸、2005年12月9日（金）」から一部抜粋、途中の見出しを文中に取り込む。¹⁾

近年日本国内の（経済上の？）独特な仕組みが破壊されていることを「グローバリゼーション」といい、それは市場原理が隅々まで行き渡ることによって完結に向かう、とのことである。この文面に従えば、現在2008年だから、国内の仕組みはますます破壊され、市場原理はより隅々に（しかしどの？）行き渡り、「グローバリゼーション」はさらに完結の度を深めているものと推測される。

このカタカナ語はどこから来たのか。何を意味するのか。この表現の使用によって何が企図されているのか。むろんそれは、個々の発話事象レベルから国家を超える「グローバルな」レベルに至るまでで、ということである。この語彙表現および関連する語彙は、「原産地」（どこ？）においてどのような概念史上の背景を持つのか。発生や変化はいつ起こったのか。変化の時間的広がりや過程はどうだったか。この用語と概念にはどのような態度や評価が付随するのか。人文科学的考察の対象である。その際、異・言語の背後にある異・社会文化および異なる歴史過程に注目する。

以下では立論への参考とした研究書・論文には通常の文献指示を行い、言説のサンプルとしての資料には該当箇所を典拠を示すが、URLなど煩雑な情報は注に含める。

2. 準備作業

2. 1. 用語事例

ラテン語 globus に起源をもつ globalisation(globalization) という表現は、外来語として「グローバル化」(あるいは最近では現代中国語の対応表現である「全球化」) という用語で目にする。手近なところで、国立情報学研究所 (NII) が運営する Webcat Plus で「グローバル化：A」「グローバリゼーション：B」を一致検索すると以下のような状況が示される。雑誌記事以外の一般および専門図書類 (研究報告書を含む、邦語) の件数である^{*2} (2008 年度は 6 月までの調査と考えられる。)

年 次	2008	2007	2006	2005	2004	2003	2002	2001	2000	1999	1998
件数 A :	32	64	71	68	66	65	38	30	30	20	21
B :	29	35	44	44	52	35	52	43	30	29	15
計 :	61	99	115	112	118	100	90	73	60	49	36

年 次	1997	1996	1995	1994	1993	1992	1991	1990	1989	1988	1987	1986
件数 A :	7	13	5	10	6	6	13	12	8	6	0	0
B :	14	9	6	3	4	7	10	6	5	3	2	1
計 :	21	22	11	13	10	13	23	18	13	9	2	1

ここに関連図書の全てが網羅されていないにせよ、2000 年以降は月平均で 5 点以上 10 点以内、つまり平均で毎週 1 点以上の関連図書が刊行され続けていることになる。日本では 1986 年 (チェルノブイリ原子炉事故、スローフード運動創始など) 以降この用語のパブリックな使用が本格化したことは興味深い。「グローバル化」は一致検索で 590 件程度、雑誌類まで含めた「連想検索」では 11 万 6 千件以上 (116,091)、「グローバリゼーション」は前者が 480 件前後で、後者が 1568 件である。「全球化」は一致検索で 5 件のみであり、連想検索では「肉球」など関連外の情報が多すぎて実態が不明である。なお以下で取り上げる用語「グローバリズム」は同様の一致検索で 105 件、連想検索で 456 件が該当する。全体として見ると、関連用語として「グローバル化」が頻用されることが分かる。

全てを精査したのではないが、これら刊行物でもっとも目につくのは「鉄鋼流通の新たな次元：コイルセンターのグローバル化」「グローバル化のなかの中小企業問題」「資本開国論：新たなグローバル化時代の経済戦略」「新しい日本型経済パラダイム：グローバル化と人口減少下の持続可能経済」といった経済・経営関連である。さらに「グローバル化する世界と法の課題：平和・人権・経済を手がかりに」「危機管理と行政：グローバル化社会への対応」「グローバル化と社会的排除：貧困と社会問題への新しいアプロー

チ」「家族の変容とジェンダー：少子高齢化とグローバル化のなかで」「グローバル化の時代における新たな人間像と教養教育の創造」「グローバル化のなかの宗教・文化的影響・ネットワーク・ナラロジー」などに見られるように、社会・文化の様々な領域における関心の分布が推測される。

上でも言及したが「グローバル化（globalisation）」ということは何が意味され意図されているのだろうか。学的な理論化への志向の有無を問わず、いくつかの定義的言説を見ていく。

1) WEB『みんなの知恵蔵』：グローバル化^{*3}（一部省略）

国家、地域などタテ割りの境界を超え、地球が1つの単位になる変動の趨勢や過程。グローブ(globe)とは、球体としての地球の意味。1970年代、地球環境が人類的課題だという意識が生まれたことなどから広く使われるようになった。冷戦期には、東西分断を超える人類的視点をグローバルと呼び、世界平和を志向する用語。国家ではなく人類の視点から、環境破壊、戦争、貧困などの地球的問題に取り組む「グローバルに考えて、ローカルに行動する」という標語も広まった。90年代には、経済のグローバル化が強調された。各国が金融自由化を進め、情報通信システムの統合が加速した。巨大企業が世界を市場や投資先として競争を展開し、政府は資本への規制力を弱体化させ、短期の資本移動や為替の投機的取引に対する統治能力が弱まった。地球の1カ所の経済破綻が、通貨危機や世界同時不況として波及する事態が相次いだ。国民経済は構造調整が迫られ、広範な倒産や失業が広がった。これら経済のグローバル化は、実質的には米国の経済的優位に重なることが多い。グローバル化は資本の支配の貫徹であり、貧富の差を拡大し、環境と固有文化を破壊するという反グローバリズムの主張が力を増している。マイナスの価値を示す言葉としてグローバル化が語られることも多くなり、言葉の二面性が強まっている。(坂本義和 東京大学名誉教授／中村研一 北海道大学教授 朝日新聞出版発行『知恵蔵 2007』に基づく)

2) 同上：グローバリゼーション^{*4}

文脈によって異なる意味を持つ。(1)多国籍企業の地球大の戦略。資本調達、人員の雇用、生産、マーケティングなどを、一国経済を超えて世界的規模で展開すること。(2)「宇宙船地球号」とか「かけがえのない地球」など、世界が1つの共同体であるという認識や行動。環境、人口、食糧、エネルギーなど地球の問題を人類の協力によって解決する視点に立つものが多い。(上の項に同じ)

3) 「グローバル化と労働市場～歴史、理論、実証研究のサーベイ～」^{*5}

Collier and Dollar (2001)によれば、グローバリゼーション（グローバル化）とは「地球規模の統合」を指す。具体的には、輸送コストの低下、関税や商慣行といった貿易障壁の低下や撤廃、情報通信技術の発達に伴う円滑でリアルタイムなコミュニケーション手段の普及、国際的な資金フローの活発化、人口移動圧力の高まりなどによって、地球上に存在する様々な経済、

産業、社会が、空間的な距離を超えて相互に密接に結びつこうとする動きといえるだろう。(みずほ総研経済調査部 シニアエコノミスト 小野亮)

4) 「京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」ポータルサイト「プログラム内容の紹介」冒頭^{*6}

20 世紀後半から始まったグローバリゼーションと呼ばれる地球規模での瞬時情報伝達社会の到来は、その一元化への基盤となった科学技術の進歩さらには政治経済的な変化をも加えて、地域を問わず現代世界にいきる人びとの生活様式を大きく変え、人間の生に対する意味づけ、さらには価値観にも激しい転換を迫っている。いな、その転換はいたる所でしみを伴い、無数の人びとがうめき声さえあげつつある。(拠点リーダー 紀平英作：京都大学教授 アメリカ現代史)

5) 『グローバリゼーションとは何か 液状化する世界を読み解く』第 1 章から^{*7}

グローバリゼーションは、一般的には、国境を越えるヒト・モノ・カネそして情報や技術の動きの拡大を意味し、そうした越境的な状況をさす語と理解されてきた。多国籍企業による世界的統合化、金融による世界支配、世界的規模の移民、メディア産業の発達、文化の均質化、(中略)さらに現代世界のもっとも大きな課題である環境(後略)など。他方グローバリゼーションを、現代世界のイデオロギーあるいは特定の政治的実践・企図と考える立場もありうる。その場合、民営化や規制緩和を積極的に推進する国家官僚、(中略)世界銀行などの国際機関を動かす国際高級官僚、世界企業の経営者などの活動をグローバリゼーションと呼ぶこともできる。(中略)こうしたグローバルな企図に対抗する反グローバリズムの動きも、(中略)大きなテーマとなってくる。また、グローバリゼーションを交通や通信手段の発展に支えられた国境を越えるさまざまな活動の拡大・深化であり、近代の歴史において避けることの過程である、ととらえる立場もある。(伊豫谷登士翁：一橋大学教授 グローバリゼーション・移民研究)

6) 『グローバル化の社会学』から(複数段落要約)^{*8}

さまざまなグローバル化の論争から共通の概念を取り出すと、(中略)相互の境界が明確な閉ざされた国民国家とそれに対応した国民社会という空間の中で人々が生活し、行為するという考えを覆すことである。グローバル化とは、経済、情報、エコロジー、技術、文化横断的なコンフリクト、ひいては市民社会といったさまざまな次元で、日常の行為が国境に制限されなくなるのを経験できるということである。(中略)グローバル化とは距離の消滅であり、望んでもいないしとらえることもできないトランスナショナルな生活形式に投げ込まれた状態である。(ウルリヒ・ベック：ミュンヘン大学社会学研究所所長)

7) 『社会学』概説書から(複数段落要約)^{*9}

国境を越えた社会的、政治的、経済的結びつきが、それぞれの国で暮らす人びとの運命を、決定的に条件づけている。このような世界社会の相互依存性の増大を指称するために、グロー

バル化という用語を使っている。（中略）今日、世界社会を悩ませている問題の一つは、国際連合の存在にもかかわらず、グローバル化が、政治的統合とも、国家間の富や権力の平準化とも呼応しないかたちで進展していることにある。（中略）グローバル化は、一体化された世界を生み出していない。むしろ反対に、グローバル化はいくつかの社会的分裂と社会的葛藤を生み出している。（アンソニー・ギデンズ：LSE ディレクター）

8）社会学者の発言記録から（複数段落要約）^{*10}

「グローバリゼーション」とはまさしく「神話」である。強力な言説、社会的な力を持ち信仰の対象となる観念だ。福祉国家の成果に対するたたかいの主要な武器である。最低賃金制が存在しない、ヨーロッパの賃金の4分の1から15分の1の賃金で1日12時間働かされる、組合のない、子供が働かされる国々のモデルを示して「弾力性」を押しつける。夜間労働、週末労働、不規則な労働時間などのことだ。いずれも昔から、経営者の夢の中に書き込まれている事柄である。ネオリベラリズムとは、もっとも古臭い経営者のもっとも古臭い考え方がシックでモダンなメッセージという衣装をまとうて復活したものだ。（中略）「グローバリゼーション」の神話は復古を、つまり野放しの、しかし合理化されたシニックな資本主義への回帰を受け入れさせることをその役割としている。（ピエール・ブルデュー：コレージュ・ド・フランス教授）

これらから読み取れる関連用語の基本的な性格づけと、この用語が表す事象に関して指摘された問題点は以下ようになる。

<基本的性格>

- * 国家ではなく人類の視点から環境破壊などの地球的問題に取り組む。世界が一つの共同体であるという認識や行動。一国経済を超えて世界的規模で展開すること。
- * 地球規模の統合、地球上に存在する様々な経済、産業、社会が、空間的な距離を超えて相互に密接に結びつこうとする動き。
- * 地球規模での瞬時情報伝達社会、一元化。
- * 国境を越えるヒト・モノ・カネそして情報や技術の動きの拡大、越境的な状況。
交通や通信手段の発展に支えられた国境を越えるさまざまな活動の拡大・深化。
- * 相互の境界が明確な閉ざされた国民国家とそれに対応した国民社会という空間の中で人々が生活し、行為するという考えを覆すこと。
- * 経済、情報、エコロジー、技術、文化横断的なコンフリクト、ひいては市民社会といったさまざまな次元で、日常の行為が国境に制限されなくなる。距離の消滅。
- * 世界社会の相互依存性の増大。

<問題点>

- * 実質的には米国の経済的優位に重なる。グローバル化は資本の支配の貫徹であり、貧富の差を拡大し、環境と固有文化を破壊するという反グローバリズムの主張が力を増

している。むしろマイナスの価値を示す言葉として語られることも多くなり、言葉の二面性が強まっている。

- * 現代世界のイデオロギーあるいは特定の政治的実践・企図であり、そのグローバルな企図に対抗する反グローバリズムの動きもある。
- * 政治的統合とも、国家間の富や権力の平準化とも呼応しないかたちで進展している。一体化された世界を生み出していない。
- * 「グローバリゼーション」の神話は復古を、つまり野放しの、しかし合理化されたシニックな資本主義への回帰を受け入れさせることをその役割としている。

同一あるいは類似の用語でありながら、様々に異なる領域の事象や態度が明示され示唆され前提されることが分かる。たとえば、グローバル化は統合を言うのかそうでないのか、グローバル化とグローバリズムの違いは何か。用語の整理が必要だと思われる。次節ではその点を主題にした研究を紹介する。

2.2. 用語・概念の差異化

上でも一部を引用したベック (2005) は、その第2章で、「グローバリズム」に対置して「グローバリティ」および「グローバル化」を区別し、それぞれを以下のように定義する。重要な論述なので、やや長めになるが詳細に示す (同書 26-32: 筆者による若干の修正、省略、入れ替えおよび補足あり)。

- ① 「グローバリズム」とは、世界市場が政治的行為を排除する、あるいは政治的行為が世界市場に置き換えられるという見解、すなわち世界市場の支配というイデオロギー、新自由主義のイデオロギーである。そのイデオロギーは因果関係を単一のものに還元し、経済主義的にものごとをとらえ、グローバル化の多次元性を単線的に経済というひとつの次元に切りつめてしまう。それ以外のすべての次元(エコロジー、文化、政治、市民社会)を語る場合でも、世界市場システムの優位という想定のもとでのみ、それに触れるにすぎない。経済行為がそもそも可能になり正当化されるような法的、社会的、エコロジー的枠組みの輪郭を描くという政治の中心課題が、視野から外れるか、隠蔽される。グローバリズムが想定しているのは、国家、社会、文化、外交政策が企業のように舵取りされるべきだということである (大学も?: 筆者補足)。経済的なものの帝国主義が問題であり、企業はこの帝国主義のもとで、みずからの目的を最大限に達成しうる枠組みをものにしていく。(上掲書 26-27)
- ② 「グローバリティ」が意味するのは、われわれははるか以前から世界社会のなかで生活しているのだということである。世界社会という言葉が意味するのは、国民国家の政治に統合されない、あるいは規定されない (しえない) 社会関係の総体である。閉ざされた空間という考えが虚構になり、どの集団も互いに閉め出すことができない。さまざまなエコロジー的、文化的、政治的形態がぶつかり合う。自明とされてきたも

の、たとえば西洋的モデルの自明性さえも新たな正当化を必要とする。その際、（マスメディアに演出された）世界社会の自己認識が重要であり、狭義の世界社会とは認識され反省された世界社会を意味する。世界社会の広がりについての問いは、世界中の人間と文化はその差異のなかでお互いが関係づけられている様をどのように、どこまで認識するか、この世界社会による自己認識は行為にとってどのくらい重要なのか、という問いに置き換えられる。「世界・社会」という複合語において「世界」は差異と多様性を意味し「社会」は統合されていないことを意味する。世界社会は統一性のない多様性で見なすことができる。トランスナショナルな生産形態と労働市場の競争、メディアのグローバルな報道、トランスナショナルな不買運動や生活形式、グローバルだと認識された危機、戦争、原子力（兵器や事故：筆者補足）、自然破壊などさまざまな事柄がその前提である。（同書 28-29）

- ③「グローバル化」とは、トランスナショナルな行為者の権力獲得機会、行為の方向性、彼らの自己理解、ネットワーク形成によって、国民国家とその主権が弱められていく過程（プロセス）を意味する。いったん成立したら後戻り不可能なグローバリティに対して、（古風な言い方では弁証法的な）過程としてのグローバル化という概念が区別される。この過程はトランスナショナルな社会的結節点と空間を作り出し、ローカルな文化の価値を引き上げ、第三の文化を発生させる。

エコロジー、文化、経済、政治、市民社会のそれぞれのグローバル化には固有の論理が併存していて、それらは相互に還元、模倣ができない。これら論理はそれぞれ独立にそれ自体として、かつ相互の依存のなかで解明、理解されねばならない。それによってはじめて政治的行為の見通しと領野が開かれうる。そうすることではじめてグローバリズムという脱政治化の呪縛から解き放たれる。（グローバル化過程の帰結としての：筆者補足）グローバリティの多元性の視点をもつことではじめて、グローバリズムという即物的強制的イデオロギーが破綻する。

今日の（そして将来の）グローバル化過程の特殊性は、エコロジー、文化、経済、政治などの領域で、社会的空間とメディアによるイメージの流れとならんで、リージョナル・グローバルな関係網とマスメディアによるその定義が、経験的に確認できるほどの広さ、密度、安定性に到達した点にある。世界社会はすべての国民社会が吸収されるメガ国民社会ではなく、多様性と非統合を特徴とする世界地平である。この地平は、コミュニケーションと行為によって作られ保持されるときに開かれる。（同 29-32：原著の論述順をやや組み替えた。）

先の節で示したさまざまな言説における用例は、表現のいかんによらず、バックが明快に定義する上の3つの概念のどれかに、あるいはいくつかに重点があると理解できる。たとえばブルデューの用例では専一にイデオロギーの側面に重点がある。「グローバリゼーションの神話」とは、イデオロギーとして喧伝される「グローバリゼーション」であり、つまりは新自由主義（「市場独裁主義」）のグローバリズムである。

ベックは「高度に政治的な行動だが、まったく非政治的な態度を装った高度に政治的な行動」(同書 231) としてのグローバリズムを批判するが、トランスナショナルな行動が作り出し、また前提とする世界社会形成とグローバル化自体の可能性は評価する。グローバル化過程の帰結としてのグローバリティは後戻りさせられないというベックの所説を換言すれば、それは孤立した集団の寄せ集めでなく、全体としての、ただし統合されず超国家を欠く人類社会の成立とその不可逆な過程ということである。

この関連で興味を引くのは、論者が上で「グローバル化はローカルな文化の価値を引き上げる」としている点である。世界社会は、現実がそうでないからイデオロギー的に強調される類の統合ではなく、実はローカール・グローバルの関係軸を意識した諸々のローカルな行為から形成されることが理解される(同 93-96)。その意味で「ローカルに考え、グローバルに行動する」ことを同書の監訳者が称揚するのも理解できる(同 320)。

筆者が他の場所ではそうしているように、以下ではカタカナ語の煩雑さを避けるためにも、グローバル化を「全球化」、グローバリズムを「全球主義」、グローバリティを「全球性」とする。ただし他者の言説について言い及ぶ場合はその限りでない。

3. 全球(化)概念の異文化性

3.1. 視点設定

上で紹介したトランスナショナルな知識社会学の視点からの、とでも性格づけられる問題設定を、人文科学的、あるいは人間学的に再理解、再定義することが本稿の認識関心である。世界社会の地平は「コミュニケーションと行為によって(つまり圧倒的に記号の媒介を通じて: 筆者補足) 作られ保持されるときに開かれる」のであり、「狭義の世界社会とは(記号の助けによって: 筆者補足) 認識され反省された(ものとして記号的に提示される: 筆者補足) 世界社会を意味する」のであれば、問題の領野は確実に人文科学に及んでいる。まさしく人間は時空の4次元に加えて、記号で媒介される表象の世界という第5の次元にも住むからである(Elias 2001, 76-77)。

記号を媒介にして表象され共有され社会的諸機能へと動員された(される)像としての「世界」が問題である。ここで主題とされている(最低)3種類の用語は、ラテン語の言語表現としての *globus* に基礎を持つ。語源の詮索とは別に、「世界」が問題となるなら、言語表現 *globus* は、古典古代以来容易に概観できないほど多様な概念史的背景を有することを指摘せねばならない。その全体についての再構成的な提示は本稿の課題ではない(下記の Vogel 1995, Krüger 2007 を参照)。ここではより慎ましい課題を設定する。それは、*globus* および関連・隣接の語彙表現が反省の努力を必要としないほど基礎的な知識となっている「彼らの」理解にとって、「世界」と *globus* などの用語とが歴史的にどのような関連を形成してきたのかを、一つの異文化性として理解することである。関連の表現を使用する者が皆、かつ常に、字義に直接対応するような自覚的な意図

と表象を持つわけではないが、当該の表現の使用に際して、前提とされ当たり前になっている意味成分と意義関連とを説明することを目指す。

その帰結として、上で見た世界社会についての社会的言説、あるいはその他の言説において、彼らにとっての間主體的な了解可能性の基盤が何であるかについて我々の理解が容易になることが期待できる。上で見たように、経済領域などでは、我々（日本人？日本国民？市民？消費者？労働者？経営者？投資家？）が設定したのではない基準による高度の統合（「地球規模の統合」）への要請が告知されている。にもかかわらず、ローカルな社会文化の基盤がもつ独自性（価値）およびそれら相互の差異が認識され、自己回帰的に表現されていないために、自然過程ではありえない（新自由主義のイデオロギーである）統合の要請という行為への適切な対応が見いだせないことも理解される。

3.2. 「全体」の概念

直訳で『人はどれくらいグローバル化に耐えられるか』（Safranski 2003）という著書の第一章で、著者リューディガー・ザフランスキーは、人間が、動物にも見られる悟性（道具的知能）だけでなく、理性を持つ存在であること、「理性の存在としての人間の経歴は自分自身から歩み出ること、つまり超越の歩みから始まった」（同書7）と述べる。超越、つまり距離を置き全体を見渡す能力は、神に似た者という感情を抱かせる、と著者は続ける（同8）。

ここでやや誇張された表現で指摘されているのは、人間の持つ、全体をそして自己自身をも対象として構想し想像する能力である。ザフランスキーは述べていないが、この能力自体およびその表現は記号操作の能力と密接に関連していることも周知である。そのことは「全体を見る神」という表現、また「宇宙」「地獄」「天国」「十億土」「この世」「あの世」、あるいは他の様々な言語において対応するであろう表現を見れば理解される。意味論から見ると、「文化」「人類」「世界」などを含めて、この類の語彙は全体性で特徴づけられる概念（Totalitätsbegriff: Hermanns 1999）を表現する。「全体」が具体的に、あるいは論理的にいうと外延的に捕捉し枚挙できるかどうかではなく、理念的に「全体」として構想できるという点が重要である。

認知意味論の指摘を待つまでもなく、記号に支えられた人間の構想力の発現、つまり記号表現の生産・受容（理解）にあつては、人間自身の身体・知覚・環境などの与件が基準項として参照される。「全体を見る神（人）」という表現を理解する人（のある者）は、（ある人びとには洗神のかもしれないが）髭を生やした老人（男性！）が映画「スターウォーズ」の背景のような場所で土星や銀河系のような天体を眺めている図を想起するだろう。同じ様には想起できない理念的な対象も言語的・記号的に構成することができる。数学など多くの学的活動はその能力によっている（裸の特異点、加算の／非加算の無限集合など）。信仰にかかわらず、「神が世界を創造する」という言語表現を理解し、その様を想起する人にとって、行為者は人としての自分の似姿であり、行為の様は具体的に想像しがたいにせよ、腕を上げてかざすなど何か身体的操作であり、その産物

は、たとえば「宇宙」や「地球」といったものにあたるだろう。こういった表象がまじめな信仰にとって疑わしいものであるとしても、人類に普遍的認知・構想の能力は、そういった像の産出を可能とする。（「まじめな信仰」もその能力の産物である、と考えることもできる。）

ザフランスキーは上で言及した箇所のすぐ前で「理性が動き出すのは、理性が意志を支えるというより、意志を引き起こすとき、つまり長期的な目標を立て、そのために意志を動員せねばならないときにである」と述べる（同書7）。より具体化して言い換えるなら、長期的に（かつ多くの主体の）意志を働かせ続けられるよう、目標の像を明確化し、自他に了解可能なかたちにするのは、ここでは理性とされているが、我々の用語では、記号操作による認知（知ること）・思考（考えること）・相互行為（言うこと）の能力である。

まったく未踏の西の海域に乗り出してその向こうにあるはずのインドに到達しようというコロンブスらの企図は、思いつきの冒険心からではなく、それなりに根拠があるとされていた理論的実践的知識と思考と構想に基づいた他者への働きかけによって可能となった（Krüger 2007, 33-34, 43-45）。その知識とそこから導き出される行為の構想を支え、目標を明確化し、目標達成への意志を持続させた契機の一つは、地球と世界の像、具体的には今日の地球惑星像とは異なるにせよ、globus（球体）としての *sphaera terrae*（四大、4元素の球体的成層構造としての地球）の像である^{*11}。

本論考の主題との関連でいえば、多くの論者によって、全球化現象の開始時期はさまざまであり、その過程にはいくつかの段階があるとされている。この現象は出現して短時間しか経ていない（20世紀後半、この数十年）という意見から（上の言説見本4、伊豫谷（2002, 63））、19世紀ヨーロッパの産業化によるとするもの（言説3の典拠文献：小野（2007, 5）は開花時期とする）、さかのぼって16世紀以降大航海時代のヨーロッパによる征服と植民地化の時期以来という説（小野（2007, 5）、フリン／ヒラルデス（2006）は1571年説）、さらには古くローマ帝国にも一定の意味を見る立場があり（ラモネ他2006, 112-113）、もっとも長期の視野には現生人類がその発祥地アフリカから全世界に拡散する100万年に及ぶ過程全体が含まれる（Krüger 2007, 30-31）。最後の説を除いて、いずれもヨーロッパおよびアメリカ（合衆国）を基準にする。当面のところ、狭い意味で全球化の過程をヨーロッパの全球化ととらえる視点は否定しがたい。

上記の関連で、全球化の重要な節目にあって、globusの像が行動の構想において決定的に重要な役割を果たしたという歴史的事実を評価し、我々の社会文化とその歴史的来歴上で必ずしも優勢でなかった「全体性の概念」を異文化として解明することには意義がある。ザフランスキーの言葉にも見られるように、全体性の概念が世界の創造者であるとされた神のそれと不可分であった（あり続けている）ことも、異文化性の一項目として確認しておきたい^{*12}。

3. 3. globus と関連語彙の社会文化誌（史）

3. 3. 1. globus

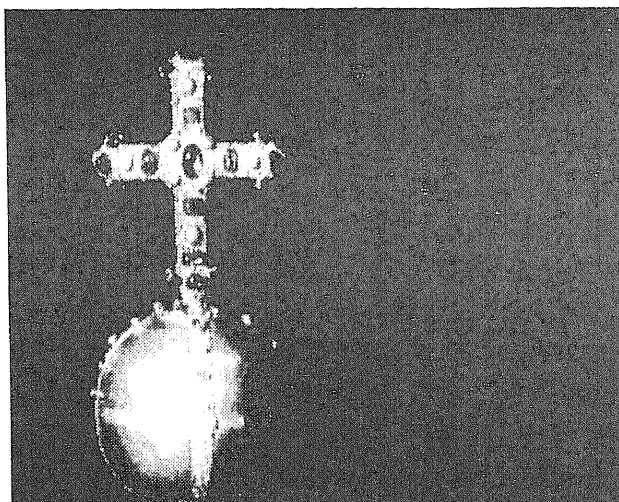
主題の語彙および関連する用語の発生・成立に関する古典文献学的な精査（Vogel 1995 がきわめて詳細）ではなく、それらを歴史過程を通じてすでに広範に共有された知識として検討する。

"globus" とは、ラテン語として、またそこから現代諸語への借用語（英語 globe など）として、「丸められたもの、球、地球、天球、地球儀」を意味する。上でも参照した「グローバル化の考古学」の題目をもつ論考の著者ラインハルト・クリューガー（Krüger 2007, 31）の指摘によると、球体としての地球の像は古典古代以来中世末まで絶えることなく伝承され精密化されていた。コンパスに頼らず天体観測に基づく堅実な航海法とともに、コロンブス西航の技術的基盤でもあった（同所および 44）。現存する最古の地球儀は 1492-1493 年にベーハイムがニュルンベルクで制作したものである。ただし類似の物はそれ以前にも制作されていた（同 48）。

クリューガーによると、中世ヨーロッパにおいて平板な地球象は例外（文献上 3 者のみ）で、航海の実務においても球体の像が優勢であった（同 44）。中世は非科学的な暗黒時代であり、愚かな人びとは、人の住む世界を平板であると観念し、海の果てが滝のように奈落へ落ちているという象に恐れを抱いた、といった歪められた像は、早い時期では 17 世紀、特に 18 世紀以降の啓蒙主義期に始まる。その類の偽装された時代像は、反宗教プロパガンダと近代の自己像の美化のために創作された（同 48-49）。コロンブスとその同時代人については、とりわけ 19 世紀前半以降、北米の作家 Washington Irving が事実に反する創作によって、その後の当該時代像を操作し決定づけた（同 49）。

ベーハイムは作成時点でコロンブスの航海を考慮していないので、その地球儀には「新大陸」が記入されていない。当のコロンブス自身は、自分がインドに到達したことを疑わなかった。ベーハイムにやや遅れて、1507 年にフライブルク（ブライスガウ）の地理学者ヴァルトゼーミュラー（Martin Waldseemüller 1470 頃-1522）は、リングマン（Matthias Ringmann 1482-1521）と共同で、アメリゴ・ヴェスプッチの探検成果に基づき、新大陸（Mundus Novus：新世界）の存在と彼らの命名による「アメリカ」を球体を前提とする地球全図に記入した¹³。

ちなみに中世ヨーロッパで皇帝や王の支配とその対象を象徴するのが直訳で「地球リング（Erdapfel）」あるいは「帝国リング（Reichsapfel）」という表現に対応する以下のような球形の物体である。これは、古代ローマの伝統を受けて歴代の神聖ローマ帝国皇帝が即位の儀式において手にした球体で、今日の意味での地球惑星ではなく、元素の成層としての地球と天球を表す。中世の歴史過程で、球の部分の宇宙像としての象徴性は薄れたが、支配権の強調という側面は残った（Vogel 1995, 360）。十字架はもちろんこの「世界」がキリスト教の主張する意味で神の創造によること、また皇帝権力の正当性がそこに由来することを示唆する。同様の小道具はヨーロッパ諸地域の様々な支配者の画像にも描かれている。



(<http://www.br-online.de/bildung/databrd/her1.htm/fakten2.htm>)

「最初の地球儀」が16世紀に作られたとするザフランスキーの記述 (Safranski 2003, 13) は誤りであるが、「それ以来、模型であるにせよ、グローバルな意識への物質的対応物が存在する。少なくとも模型の形で世界を手に入れたのである。」(同所) という論述は適切であり、多くのことを示唆する。彼が指摘する歴史的事象と彼の叙述自体に注目し、かつ前章の冒頭に示した様々な全球化に関する言説のサンプルを想起して欲しい。

全球化・グローバル化とは、個別的で現実的な視点からは「国境を越えるヒト・モノ・カネそして情報や技術の動きの拡大」(上記伊豫谷) と捉えられる一方で、「模型の形で世界を手に入れる」ような理念的認識の働きでもある。日本語話者の社会では前者の意味成分、つまり拡大が優勢に見えるが、実は「縮小(模型、距離の消滅)」の意味成分もそれに劣らず、むしろ勝って重要であることを理解すべきである。理念的には神の創造の対象、つまりある一つの「全体」(そのまた一部分) として措定できるが、実践の現実にとっては広大無辺の拡がりとも見えるこの世界(人の住む世界) が操作可能なかたちで手の内にとれるということである。上で皇帝支配と支配圏の模型的象徴として「帝国リング」を紹介したが、模型であれ(あればこそ)、手の内にとれる世界について語ることは、ヘゲモニーの主張と無縁でない。

上の意味で、つまり理念だけでなく、現実に関わりかけができるかたちで、かつ元素の成層ではなく水陸連続の実体的な球体であることが経験された地球、その新旧大陸のすべてを結ぶ通商路が初めて成立した1571年は、たしかに重要な分節点を成すと言える(フリン／ヒラルデス 2006, 22)。ただし、フリンらの主張するように、その年が現代に至る全球化過程の開始年それ自体にあたるかどうかは別の問題である。

3.3.2. 関連語彙

全体概念としての「世界」に関連する伝承された語彙をいくつか検討する。いずれも現代のヨーロッパ諸言語で、古典語形式のまま、あるいはそれぞれに特有の形式的意味の変異のもとに、語源を意識しながら一般的に用いられる用語である¹⁴。

ラテン語 *mundus* は「世界、宇宙、世界秩序」の基本義を持ち、*mundus intelligibilis*（理性でのみ把握できる観念の世界）や *mundus sensibilis*（感覚で知覚できる世界）という用語に見られるように、元来「球」である *globus* よりも抽象的理念的な意味を持つ。ピタゴラスにまでさかのぼるとされる宇宙観・世界観によれば、神の創造物としての宇宙の秩序は音楽的な秩序でもあり *harmonia mundi* と呼ばれる。これはケプラーの著書名でもあるし、現代の音響消費財生産企業名でもある。（末裔のフランス語で「世界」は *monde* であり、現代用語としての「全球化」は *mondialisation* とされる。）

ラテン語 *universum* は「一に帰一するもの、全部を包括するもの、万有、宇宙」を意味し、大学を表す *universitas* や全学問領域を表す *universitas litterarum* などの派生表現を有する。現代語としては天体物理学的な宇宙（空間）をも言う。同様にギリシア語起源の *cosmos* は宇宙、とくに（*chaos* と対置されて）秩序と調和のある世界としての宇宙を言う。現代語では「民主主義のミクロコスモス」などの派生的な用例が見られる。いずれも現代語における比喩的表現（「バッハ作品の宇宙」など）は別として、*globus* よりも普遍的全体性という意味成分が明確である。

これらに対して、現代諸語にまで存続してこなかったが、ラテン語 *orbis terrarum* の原義は円・車輪形（*orbis*）の大地（地球）であり、ギリシア語起源の *oecumene*（原義は、人の住む土地、歴史的に狭義にギリシアの地、ついでローマ帝国さらにはキリスト教徒の世界）と相似の脈絡で使用された。これらはすぐ上で見た普遍的全体に関わる語彙よりも現実に近い世界を関説する。ちなみに中世に一般的な「T O 地図」は、アジア 2 分の 1、ヨーロッパ 4 分の 1、アフリカ 4 分の 1 の比率に「人の住む土地」を分割する図であるが、大陸とそれを囲む大洋を「O」の文字で、その内部分割を「T」の文字で表す。これらは同時に *Orbis Terrarum* という書記表現の最初の文字でもある（Krüger 2007, 42）。この語彙は元来地球全体を意味しているが、当時現実に人が住むとされたアジアなどの大陸部分を円形の大洋が取り巻く表象への適用が優勢となった。しかしこの（人の住む）大陸の提示を目的とする地図から、平板な地球像の一般的存在を主張することはできない、とクリューガーは言う（同所）。

古典古代以来、現代とは異なる意味合いの自然研究において優勢だった 4 元素（四大：土、水、空気、火）の像とそれらの相対的位置関係が、宇宙の中心と目された地球について論議された（Vogel 1995 は全体がこの問題を扱う）。これも直接には現代語まで生き延びなかった表現であるが、地球におけるエレメント（元素）の球体的成層を *sphaera terrae* という。いずれも様態、関連項、程度の差はあれ「全体」を言い表すことに共通点がある。上記のように（注 11 も参照）、コロンブスの時代には、球形の地球における元素（とくに土と水）の球体的成層構造の様態（とくに離心か同心か）がまじめ

な議論の対象であった。大洋の果てが奈落に落ちるという後代に流布された像は、当時の宇宙と地球に関する観念の実情に全く合致しない。

何らかの意味で神や聖なるものや世界の意味に結びついていたこれらの表現と概念が、地球および宇宙像の革命的転換 (Vogel 1995, 第5章 384 以下とくに 452-) を経て、現実には適合的ではあるが、世俗化され矮小化される歴史過程の細部についてここで触れる余裕がない。ただし理念的な全体像としての矮小化は、現実と実践において、つまり「人の住む世界」では、係争における権利の要求対象領域の拡大を意味した。

3. 4. いくつかの含意

聖性の大部分を失った、操作可能な「全体」「世界」「地球」の像は、(彼らの間では) もちろん現代にまで引き継がれている。このコンテキストにおいて、「地球規模の統合」という表現および対応する表象は、たんなる自然現象や非意図的推移でないとしたら、どのような具体的な行動プログラムを示唆するのだろうか。2章で見たように、ギデンズとベックという二人の社会学者の意見では、統合されていない(むしろその逆: 差異と多様性)とされる現実の現代世界について、そういった言明は何を意味するのか。これを企図する行為主体が、自己の構想に沿って、この適度に縮小したとされる人の住む世界全体を操作する、ということであり、文脈によっては覇権の宣言でもある。「成り行きとして皆で一つの世界にまとまる」というのではなく、現実には存在する差異にかかわらず「全体を自分(達)が仕切る」という意志の表現である。この表現(統合)を口にする相手に向かって、「それは脅迫ですか」と応じるのは単なる冗談ではないだろう。

模型的な象徴が表す表象のあるところには、それに対応する行為への意志がある、という関連を見ようとしなない、あるいは忘れる傾向は、「彼ら」より「我ら」に顕著ではないかと自問する必要がある。(13世紀ドイツ騎士修道会について言われる「鉄の聖書」とは、プルセン人ら異教徒のバルト族に向けられた十字軍キリスト教徒の武器、剣のことであり、改宗要求に従わない者への殺戮と抑圧の意志でもある。)

ザフ랑스キーは上掲書において、ヨーロッパで18世紀末の革命以来顕著な政治化(政治の全体化)に伴って、世俗化、大衆化が進み、宗教の領分だった世界の意味への問いが政治に向けられるようになったこと、および19世紀以来の経済(の全体)化の結果、世界の真理が商品になったことを指摘する(同書 65-67)。彼はさらに現代の全球主義において政治化と経済至上主義が収斂すること、その帰結として、今日言われるグローバルなものの息苦しさの原因が、還元、矮小化、視野の狭さにあると言う(同 67-68)。「まったく非政治的な態度を装った高度に政治的な行動」(ベック: 上記 2.2.)としての全球主義が目指す経済至上・市場絶対による「地球規模の統合」が息苦しいのは当然だということである。その意味での「統合」は自然的過程ではないという点を確認する。

ここで本論考の冒頭(第1章)で示した「グローバリゼーション」の用例を想起しよう。日本国内の(経済上の?) 独特な仕組みが破壊されていくことを「グローバリゼーション」

といい、それは市場原理が隅々まで行き渡る（！）ことで完結に向かうのだという。この言明に関連する可能性のある多層多重の行為主体（集団）とその意図および企図がまったく不鮮明で、自然現象の記述のようである。誰が何を目指してどのように行動するのかが明示されていない。「13世紀以降バルト海地域のキリスト教化が進んだ」という言明の背後に、ある集団の意図的暴力的強制の下、その意図に従わない数万数十万の非キリスト教徒に対する殺戮と抑圧があったことは知られている¹⁵。「三千世界」ではなく、今や操作可能となった（とされる）一つの世界を想定して意図的操作（オペレーション）を構想する政治的経済的行為主体について、ザフランスキーは、「グローバルプレーヤー達は、この上なく身勝手にローカルな自己の利益を追求する、地球規模で」と述べる（同書 88）。

この関連上に今少し原理的な問題への含意を点検する。それは *universum* や *globus* などに典型的に見られる「全体性」のもつ含意である。これは「唯一の全体」「その全体が唯一」という一般的な意味成分それ自体については中立的であるが、意志に関わる模型的象徴としての側面では、きわめて偏狭な指向性を可能にする。つまり「全体」はそれを構想する主体（の集団）に応じて任意に多種多数存在するのか、それとも、ある「全体」だけが存在しその他はありえない／認めないのか、という対極的態度を想起すれば問題が明確になる。神が創造したとされる世界と、近現代の自然科学が生物・非生物について進化の跡を見いだすような世界とが一致しないということでもある。政治化されれば、生物学の授業時間に「神の創造した世界」（それも特定唯一の）を紹介せよという要請へ至る。

是非は別にして、このような事象と問題は、それをめぐる抜き差しならない論議に巻き込まれたことのない我々（だれ？）にはさしあたり「異文化」である。循環論的ながら、この場合「異文化」とは、相手の指定する「全体」と自己のそれとの、あるいはおよそ全体性への指向の有無にかかわって、妥協不可能なとも見える対決を欠くゆえに、外形的な理解困難の印象に留まっていることを言う。

もちろん相手が「普遍的唯一の全体」を前提とし、こちらが「相対的複数の全体（三千世界？）」を主張すれば議論は複雑な様相を呈すだろう。その点で互いに異質な観念の下に生きる人びとがいること自体が相互に認識され、その上で対話の作法が相互に承認されるかどうかの問題である（ベック 153 以下：「異なる文化間の批判はいかにして可能か」）。イデオロギー的に負荷のある全球主義であっても、またベックの言う意味での全球化事象においても、異なる社会文化を背景とする主体（集団）間の相互理解の必要と困難とは日常茶飯に属することになる。その意味で、ここで見たいくつかの全体性概念は、ある人々にとって自明、あるいは少なくとも標準辞書レベルの知識であるが、他者（我々）にはそうでないことを確認し、それらの背景について社会文化誌（史）的な解明をすることが有意義であると理解される。

4. 展 望

グローバル化の言説および関連する歴史的用語の部分的な検討からは、現実に行進する過程としての（上記ベックの定義の意味で）グローバル事象自体についてはもちろん十分に解明できない。しかし異言語・異社会文化のコンテクストにおいて、当該の用語の背後に二千年以上に及ぶ意味成分（複数）の歴史的堆積過程があり、それらは様々な言説のなかで、たとえばイデオロギー的な資源として利用されうるという点については、理解が得られたと考える。事実としてのグローバル化への対応と、イデオロギーとしての全球主義への対抗に関する様々な論点の見渡しについては、ベック（2005）をはじめ文献表にあげた著書などを参照されたい。

最後に問題のより大きな枠組みへの定位のために指摘したいのは、ヨーロッパ中心主義のバイアスをどう相対化するかという課題である。部分的なあるいは広範な妥当性を認めるにせよ、ローマ帝国、大航海時代、資本主義・産業化、いずれもその文脈上の事象である。この点でクリューガー（Krüger 2007, 29-31）の論点が示唆的である。彼はグローバル事象は人類の普遍であり、その過程は百万年単位で把握できると考える。やや現代の生化学的遺伝子研究の言説に影響されているとはいえ、特定の環境に拘束されない存在としての人類の基本的な生存戦略として、移動への衝動と新たなもの異質なものの志向を指摘する。移動の少ない時期には、隣接集団間での遺伝子と文化との混合でさらに多様性を増加させる。多様性と混合が全球的な人類の適応と拡散の前提であり、遺伝子の混和と文化的知識の転移が人の生の一般的条件そのものであると言う（同）。彼はさらにグローバル事象を現代に限定することは、中世には平板な地球像が支配的だったという近現代の神話と同じく、我々自身の現代への無理解と過剰評価の危険を意味すると論じる（同 34）。

ここで上の論点の是非を検証する余裕はないが、遠くから見る（距離化）は、状況に巻き込まれている（参加）が視野の狭窄を引き起こしかねない時には有効である。

ヨーロッパ諸語で行われる言説に含まれる自然観、人間観、社会・個人観についてもこの文脈で検証すべき点はあるが、別の場所に譲る^{*16}。

注

*1 日経マネー DIGITAL、株式・投信、「マル分かり最新ビジネストrend」。

<http://nikkeimoney.jp/stocks/trend/051209.html>

なお本稿で使用した WEB 情報は、特記しない限り 2008 年 8 月末段階のものである。

*2 検索条件以外の文献も少数ながら含まれており、厳密なものではなく一般的な傾向を示すにすぎない。

- *3 <http://chiezou.jp/word/%E3%82%B0%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%AA%E3%82%BC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3>
- *4 <http://chiezou.jp/word/%E3%82%B0%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%AA%E3%82%BA%E3%83%A0>
- *5 同書 4
- *6 <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/overview.html>
- *7 同書 43-44、「ですます」体を「だ」体に変更。
- *8 同書 46
- *9 同書 91-93
- *10 『市場独裁主義批判』、65-67、「ですます」体を「だ」体に変更。
- *11 このラテン語表現自体が Vogel(1995) の主題目である。論者によると、当時コロンブスらの企図に反対する立場の論拠は、むしろ平板な地球像を前提にしたものではなく、元素（四大）としての大地（土）と海洋（水）の球体的成層構造に関わるものであった。現在のような全体として、かつ連続して陸と海とからなる惑星という像ではなく、球体の水界の性状およびそれぞれ中心が異なる水界と地界の分布の形態によっては航海が不可能であるばかりでなく、人が住むこともできないという論点が展開された。コロンブスらは、球体としての水界と地界は同心であるという、むしろ現在の惑星像に類似の立場をとったものの、球体的成層構造自体を否定したのではない（同 369-383）。
- *12 ごく最近の事例を挙げるなら、ドイツの「高級週刊紙」シュピーゲル（Spiegel）の WEB サイトに「科学」として分類された記事は、11 世紀の修道士が試みた「論理的に完全な神の存在証明」を取り上げ、それが数百年後にカントによって論駁されるまで通用した強力な論点であったことを述べる。そこで神について言われる「それを超えてさらに大きなものがない」「完全な存在」とはむしろ全体性概念を表す。（2008.9.28, <http://www.spiegel.de/wissenschaft/mensch/0,1518,577503,00.html>）
- *13 これを含めて「新大陸」では現地での呼称と無関係にヨーロッパ人による命名が一般化するが、そのことはキリスト教的背景での世界（地球）の理解だけでなく、新世界が植民地であることを当然視する権力的で支配的な意味合いを持っていた（Rinke 2008）。
- *14 フランス語の標準的辞書（Robert）ではラテン語自体の語彙は項目ではなく、別種の語源辞典での扱いとされる。英語（OED）でも項目扱いではなく、項目記述において語源として指示される。ドイツ語の標準辞典である 10 巻本の Duden（Das große Wörterbuch der deutschen Sprache）では、古典期以来のラテン語の語彙がかなり多く項目として収録されている。各言語の歴史的な来歴を想起させられる。ここでの記述は Duden による。
- *15 これを「文明化」であるという歴史記述者もいるが（ノーマン・デイヴィス：『ヨーロッパ II 中世』、131、別宮定徳訳、共同通信社）、18 世紀以降に喧伝された植民地

主義的観点の不適切な投射である。

- *16 たとえば新自由主義イデオロギーにおける「個人の能力」という概念の問題性や、より一般的に「個人主義」より包括的な個人化傾向は成果か災厄かといった問題である。

引用および参考文献

ウルリヒ・ベック (木前利秋・中村健吾監訳 2005) :

『グローバル化の社会学』、国文社

ピエール・ブルデュー (加藤晴久訳 2000) :

『市場独裁主義批判』、藤原書店

Elias, Norbert (2001) :

Symboltheorie, Suhrkamp

"Duden" (2005) :

Das große Wörterbuch der deutschen Sprache, Bibliographisches Institut & F. A. Brockhaus

デニス・O・フリン／アルトゥーロ・ヒラルデス (平山篤子訳 2008) :

「グローバリゼーションは 1571 年に始まった」、

(http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/vol_3/pdf/vol_3_article02.pdf#search='%E9%84%AD%E5%92%8C%E3%81%AE%E8%89%A6%E9%9A%8A')

(Dennis O. FLYNN and Arturo GIRALDEZ, Globalization Began in 1571, Journal of History for the Public, Vol. 3, 2006, pp. 19-33)

アンソニー・ギデンズ (松尾精文他訳 2002) :

『社会学』改訂第3版、而立書房

Hermanns, Fritz (1999) :

Sprache, Kultur und Identität - Reflexionen über drei Totalitätsbegriffe, In: Gardt, A./ Haß-Zumkehr, U./ Roelcke, T. (Hgg.): Sprachgeschichte als Kulturgeschichte, 351-391, Tübingen.

伊豫谷登士翁 (2002) :

『グローバリゼーションとは何か 液状化する世界を読み解く』、平凡社新書

Krüger, Reinhard (2007):

Ein Versuch über die Archäologie der Globalisierung - Die Kugelgestalt der Erde und die globale Konzeption des Erdraums im Mittelalter, In: Wechsel-Wirkung Jahrbuch aus Lehre und Forschung der Universität Stuttgart, Jahrbuch 2007

(www.uni-stuttgart.de/wechselwirkungen/ww2007/ReinhardKrueger.pdf)

小野亮 (2007) :

「グローバル化と労働市場 ～歴史、理論、実証研究のサーベイ～」、『みずほ総研論集』、2007 年Ⅲ号

(<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/argument/mron0707-3.pdf>)

イグナシオ・ラモネ他（杉村昌昭他訳 2006）：

『グローバリゼーション・新自由主義批判事典』、作品社

Rinke, Stefan (2008)：

25. April 1507 - Tauftag Amerikas - Die Prägekraft einer Namensgebung, Wissenschaftsmagazin "fundiert", Freie Universität Berlin

(http://www.fu-berlin.de/presse/publikationen/fundiert/2007_02/07_02_rinke/fundiert_rinke_namensgebung.pdf)

Safranski, Rüdiger (2003):

Wieviel Globalisierungen verträgt der Mensch?, Carl Hanser Verlag

邦訳 2003: 『人間はどこまでグローバル化に耐えられるか』、山本尤、法政大学出版局

Trösch, Thomas (2007):

Als die Welt zum Apfel wurde - Zum 500. Todestag von Martin Behaim,
(www.wissenschaft-online.de/artikel/895622)

Vogel, Klaus, A.(1995):

Sphaera terrae - das mittelalterliche Bild der Erde und die kosmographische Revolution, Dissertation zur Erlangung des philosophischen Doktorgrades am Fachbereich Historisch-Philologische Wissenschaften der Georg-August-Universität zu Göttingen, Göttingen, (<http://webdoc.sub.gwdg.de/diss/2000/vogel/index.htm>)